



宇田川彩 著

『それでもなおユダヤ人であること  
—ブエノスアイレスに生きる〈記憶の民〉』

世界思想社 2020年 312ページ

ISBN 978-4-7907-1744-7

それなりの期間アルゼンチンに滞在すると、何らかの形で同国のユダヤ人に関心をもつ機会が生まれるのではないだろうか。ブエノスアイレスを訪れることの多い紹介者の場合、オンセ地区で「正統派」の人々を見かけたことがアルゼンチンのユダヤ人が気になり始めるきっかけとなった。しかし、その後アルゼンチン社会におけるユダヤ人の存在を自分なりに理解することができたかという点、その答えは否である。というのも、友人・知り合いとなった「世俗的」なユダヤ人が典型的なアルゼンチン人であるように感じられ、「ユダヤ人」的な特徴が何であるのかがよくわからなかったためである。また、1994年に発生したユダヤ相互扶助協会（AMIA）爆破テロの捜査を担当し、同件の容疑者隠匿の疑いでクリスティーナ・フェルナンデス大統領を告訴したアルベルト・ニスマン検事の2015年の不審死も、「わからない」という意識を増幅させた。

このような意識を抱えているなか、本書に出会うことができたのは幸運であった。文化人類学に依拠して「ディアスポラとしてアルゼンチンに生きるユダヤ人の現在を、記憶とのかかわりから論じる」ことを目的とした本書の対象は、まさに紹介者がよく理解できていなかった世俗的なユダヤ人である。序章で本書の扱うキーワードやテーマとして「ディアスポラ」「記憶」「書物」「重さと軽さ」が紹介され、第1章で本書の対象と本書の理解に必要なユダヤ史とユダヤ教の基本知識、第2章で移民国家であるアルゼンチンの一部を形成してきた同国のユダヤ人の到着の経緯、言語、居住地域、共同体という実体の不在が確認される。そして、第3章では食、第4章では儀礼、第5章では家庭で保管されている家族写真や文書、第6章ではAMIA爆破テロで被害を受けたユダヤ科学研究所（IWO）のアーカイブの救出活動、第7・8章では「集いの幕屋」というグループを通じて、現在を生きるアルゼンチンのユダヤ人の「記憶」が豊富な事例とともにあらゆる角度から論じられ、終章で「記憶の民」としてのアルゼンチンのユダヤ人の実態、共同性、非ユダヤ人との関係性についてのまとめが行われる。

ラテンアメリカでは随一、世界でも7番目にユダヤ人口の多い国であるにもかかわらず、アルゼンチンのユダヤ人に関する日本語文献は極めて少ない。紹介者が門外漢であることもあり、文化人類学に関する議論についてはやや難解である印象も受けたが、著者がフィールドワークを通じて収集した豊富な事例は興味深いものばかりである。アルゼンチンのユダヤ人に限らず、ユダヤ人全般にご関心のある方にも本書をお勧めしたい。

菊池啓一（きくち・ひろかず／アジア経済研究所）